071065 服部紘可

啓蒙主義

理性への信頼

- スピノザ
  理性で理解できない事柄を歴史で理解
- 文献学的解釈学
  人文主義者の古典復興運動から発展
- 聖書解釈学
  宗教改革者のうちから発展
  聖書は全体として一つの意味を持っていて、部分は全体との連関で理解されねばならない

中世教父による聖書解釈 ― 教会の伝統

神学解釈学と法学解釈学に遡る

模範

ロマン主義

- カルビニウス
  著者の意図をより良く理解する為の解釈

超克

シュライエルマッハー

それまで「技術」でしかなかった解釈を一つの学問に→「解釈学」

解釈の際にテクストの再構築が必要とした
→ 心理学的解釈 = 著者がどのようにしてそのテクストを書くに至ったか微底的に調べる

対象物に対する解釈者の優位性を初めて論じた

解釈学を教義学的関心から解放し、文書のみならず発話行為を含む様々なディスクールを解釈の対象としたが、あくまで関心は個々の対象物にあり、広い歴史にはない

カント

反省哲学
理性の限界を設定

ヘーゲル

絶対哲学
理性の無限性を示唆（限界を設定した時点でそれを越えた何かを想定しているという点において）

普遍史 = 宇宙の始まりから終末迄の歴史の構築

超克

対立：歴史のアプリオリ的な構築に関して

歴史学派

普遍史の探求 = 歴史そのものの意味を問う

- ランケ
  歴史の外部から歴史を眺めることによってその意味を見出そうとした
- ドロイゼン
  ひたすら過去の史実の「調査」
  但し、自己理解が歴史の在り方を決めるとした

対立

ディルタイ

体系化

自然科学と人文科学とを明確に分割

歴史には客観的な首尾一貫性があるとした

歴史を一冊の書物の様に解釈（＝科学的手法）
部分と全体の関係（cf. 啓蒙主義的解釈学 シュライエルマッハー）
では誰も経験できない一貫性をどうやって知るのか

問題発生

個人の経験は如何にして歴史的経験となるのか

歴史の経験主体は誰か = 認識論的問題

現象学

フッサール

現象学的還元によって、客観主義を克服しようとした。つまり、人々が日々暮らす「生活世界」の中での主観原理から歴史の意味を引き出そうとした。しかし、そこで実際にどんな原理が働いているかについては想像の域を出ていなく、外部世界からそれを持ち込んでいる。その意味でヘーゲル的。

進展

ヨルク伯爵

「生」と自己意識との間の形而上学的関係すなわち「生」は自分の内からしか理解できないという点、を押さえていた

ハイデッガー

受肉理解を定式化

存在のありようを研究
↳「現存在」としての人間
= 「存在する」という事がどういう事かわかってる存在
歴史の中に"投企"的自分を理解するという事
理解という行為が人間存在の特徴

理解の際には対象に自らを投げかけている

コリングウッド

「問い」と「答え」の構造を明確化

ガダマー

☆ ガダマー解釈学の前提条件とその実践の段階

○ 前提条件

1. 先入見の有用性
   ↳ 時代的隔たりの持つ意義 = 時代が離れていれば居る程先入見が異っていることが多いということ
2. 影響史概念の導入
   ↳ 歴史の解釈者自身が絶えずその歴史によって規定されているということを知る
3. 解釈における「適用」の必要性
   ↳ 具体的状況ごとに違った仕方で意味は適用されなければならない

○ 解釈の実践

1st step：影響史的意識的方法によって経験を捉える
→ 対象の呼び掛けを聴く

↓

2nd step：「対話」する
① 解釈対象が、我々に、解釈者としてどんな先入見を持っているかを問う
② 我々解釈者の持つ先入見が自明のものでなくなる
③ 我々が対象に問い返す

↓

3rd step：地平融合
↳ そもそも過去の地平と現在の地平が別々に存在している訳ではない。理解のおこるとき、常にそこで融合が行われているのだから、地平はあくまで「企投」されていたにすぎない。この最終段階で、そのような歴史学的地平は止揚され、地平融合を起こす。これにより理解並びに解釈は完遂される。